

マタイ2章1-11節 「東方からの賢人」

1A インマヌエル(臨在)

2A 罪から救われる方(贖罪)

3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

1B 東方(呪われた地)

2B 賢者(信じる者)

3B 導く星(希望の栄光)

4B 礼拝(力と富の移譲)

本文

今朝の聖書本文は、マタイ2章1-11節です。

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」3 それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった。4 そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。5 彼らは王に言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。6 『ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。』」7 そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。8 そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。「行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから。」9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。11 そしてその家には行って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。

私たちは昨日、イエス様がお生まれになって羊飼いがイエス様を拝みに来たところを聞きました。そして今、読んだところは、イエス様が生まれてからしばらく経った時のことです。後でヘロデが、ベツレヘムにいる二歳以下の男の子をすべて殺せという命令を出し、東方の博士たちが星の出現を突き止めた時間からヘロデが割り出した、とあります(16節)。つまり、イエス様は二歳以下の子でありました。けれども羊飼いが拝みに来たのは、生まれたばかりです。そして場所も、11節に「家」とあります。飼いやおけのあるような家畜のいる所ではなく、別のところに動いています。別の場面ではありますが、けれどもどちらもが、この方をキリストとしてあがめるために来ました。

クリスマスについてであります、改めて日本において、また世界の中でクリスマスがどのようなお祝いされているかをネットで眺めました。すると、真っ先に出てくるのが「商戦」であります。サンタクロースも、何もかもが全て、物を売るためであります。そして多くが飲み会であるとか、楽しむ場になっています。そして恋人がロマンチックになる時間でもあります。そこには、酒乱や不品行も含まれることがありますね。実はこれは、クリスマスではなくて、クリスマスの前に12月25日に存在していた土着の宗教から来ています。冬至の時に祝うものですが、宴会をしたり贈り物をしたりする習慣がありました。サトルナリア祭と呼ばれますが、まさにその伝統が今日まで続いている、ということです。

しかし、キリスト教がその12月25日を別の意味に変えました。「クリスマス」とは、「キリストのミサ」すなわち、「キリストを礼拝する」ことでもあります。そして、キリストがお生まれになった時にこの方を礼拝した人々から、それでクリスマスと呼ばれています。初めのクリスマス、キリストが生まれて、この方を礼拝した人はごくわずかな人々でした。しかも、ユダヤ人のための王、また世界の救世主としては、まるで程遠い人々が礼拝しに来たのです。初めに、昨日読んだ羊飼いたちがいます。ユダヤ人ではありますが、彼らはその共同体からほとんど、つまはじきにされていた人たちです。そして今朝は、「東方の博士」であります。彼らのエルサレム訪問は、これもまた驚くべき出来事です。なぜなら、彼らはイスラエル人ではないからです。あまりにも遠くに離れた、むしろ神から呪われていると宣言を受けていた東方からやって来ています。その彼らが、星を突き止めて、ユダヤ人の王として拝みにやってきました。

1A インマヌエル(臨在)

何がクリスマスを特別なものにしてしているのでしょうか？それは昨日も話しました、「天地を創造された、永遠に生きている全知全能の神が、人の肉体をもって現れた。」ということでもあります。神が人のど真ん中に介入された人の姿を取って来られた、ということです。「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。…ことばは肉となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:1,14)」これを神学の用語で「受肉」と言います。肉体を受けた、ということです。マタイ1章22-23節を見てください、先ほど読んだ2章の手前です。「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。「見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)」インマヌエル、神が私たちと共におられるということです。これは比喩的な意味ではなく、文字通り、処女から生まれた赤子のイエス様が、天地創造、万物を創造された神ご自身であったという意味です。神であり、かつ人であったということです。

イエス様は一度、弟子にこう言われました。「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ 14:9)」また使徒ヨハネは、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。(1:18)」と言いました。神が人となられた目的の第一は、神が人にご自分がどのような方かを、はっきり示すためでありました。

私たちは、自分の思いの中で神はどのような存在かを思い描いています。ひげをはやしたおじいさんなのかな？とか、または、天と地を支配しているけれども、地震や津波で人を死なせるような酷い方であるとか、一生懸命呼び求めても一向に答えをくださらない方であるとか、いろいろ想像しています。けれども、はっきりしたことが言えないので曖昧なままになっています。そこで、人は目に見えるように神を形造ります。それが偶像、木や石や、金銀で造られている像です。目に見えない存在よりも、目に見える頼れる存在が欲しいのです。けれども、その像が何か話すわけではないし、自分の祈りを聞いてくれるわけでもありません。そして、木や石の偶像ではなくても、ある憧れる人であるとか、自分の能力を鍛えてそれを信じるとか、何か目に見えるものに拠りすがらうとしています。

けれども、本当に拠り頼むことのできる存在は、造られたものではなく、造られた方です。世界を造り、この自分を造られた方に拠り頼むことこそが、私たちを満足させます。自然を見れば、神のすばらしさが分かります。天体の星の動き、そして自然界の不思議、また人体もそうです、どんなに科学や先端技術が発達したと言っても、そのような秩序と精密な構造を決して作り出すことはできません。自然界が神のおられることをはっきりと証明しています。けれども、それだけでは足りません。自然には、神の人格、パーソナリティーが見えません。けれども神は知情意を持った人格者です。神は考えるし、神は計画するし、そして神は言葉を話すし、神は悲しまれるし、喜ばれるし、何よりもご自分の造られた物を愛し、慕っておられます。そこで神は、この終わりの時にご自分の本質を御子の中に完全に現してくださいました。

そして受肉の二つ目の目的は、「人と一体になる」ということです。天におられて、全知全能であり、この宇宙よりも大きい無限大の方が、どのように今、風邪やその他の病気で悩んでいる人に同情できるのでしょうか？会社の激務で頭がストレスでいっぱいになっている人の気持ちが分かるのでしょうか？そこで神は肉体を取られました。「…主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。…主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができになるのです。(ヘブル 2:17,18)」私たちの肉体にある弱さをすべて知っておられます。そのことによって、神は人と一つになることができました。

2A 罪から救われる方(贖罪)

そして、神が人となられた目的の三つ目は、「罪を救うこと」です。マタイ1章をまた見てください。21 節です、「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」イエスのヘブル語はヨシュアです。モーセの後を継いで、イスラエルの民を約束の地に導いたヨシュアです。ヨシュアは、イエホシュアの短縮形で、「ヤハウェは救い」つまり「主は救い」という意味です。イエス様は私たちの重荷を負ってくださいました。ご自分が肉体を取られることによって、私たちの人生の中で受ける苦しみをすべて負ってくださいました。人の負っている重荷で最大のものは、その人の罪です。天地を創造した神から目を逸らして、自分自身で生きてきた罪です。そして、神のおきてに対して背いてきた罪です。この罪の縄目に捕

えられている私たち人間を解放するために、ご自身が血と肉を持ち、その肉体において神からの処罰を受けられました。かつて、ユダヤ人は牛や羊を罪のためのいけにえにしていますが、神はご自分の子を、体を持つようにさせ、その体をいけにえとして捧げるようにされたのです。

3A ユダヤ人の王(選ばれた方)

そして、冒頭で読んだ本文に戻ります。

1B 東方(呪われた地)

1 イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った。2 「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。」

ルカによる福音書では、ローマ皇帝が住民登録をせよとの命令を出したので、全住民が自分の生まれ故郷に戻らなければいけませんでした。そのためにヨセフの故郷ベツレヘムに行きました。ローマには皇帝がいますが、ローマによって任命を受けたヘロデという人物がいます。彼はユダヤ人ではなくイドマヤという、エドム人でした。けれども、この地域をユダヤ人の王として支配していた領主でありました。

そこに東方からの博士たちが来たのです。博士というよりも「賢者」と訳したほうが良いです。占星術もするような人たちで、東方の国では、そのような者が王の側近として働いていました。今で言うならば、政府の首相に助言を与える顧問というところでしょう。そのような地位の高い人たちですから、エルサレムに来た時には政府代表団のような威厳と力をもってやって来ました。そして、ユダヤ人の王であるヘロデに向かって、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。」と尋ねたのです。道理で、ヘロデもエルサレムにいる者たちも恐れたわけです。

「東方」というのは、イスラエルからの東ですから具体的にはメソポタミヤ地方のことです。今のイラクやイランのほうからやって来ました。そして聖書というのは面白い書物で、一つの言葉が数多く出てきて、そこに一つの意味合いを持たせています。東からの風は、必ずと言ってよいほど作物を枯らせたり、水を干からびるようにさせます。これは物理的に、水気の全くない砂漠からの熱風のことを指しており、イスラエルにおいて吹いてほしくない風はこの風で、ただでさえ暑いのに風が吹くと死にそうに暑くなります。けれども、それだけでなく、東からのものは災いをもたらすものという意味合いがあります。ヨセフが見た夢は、東からの風で枯れた七つの穂が出てきました。モーセがパロに対峙している時、エジプトに対する災いとして、東風によっていなごを神は運んできました。そしてイスラエルが渡るために紅海が分かれる時、東風によって海底が見えました。ヨナ書では、ヨナがとうごまの木の下でニネベの町を見ていた時に、熱い東風を吹かせたので、とうごまを枯らせてしまいました。

そして創世記に、人が 罪が入り込んだのは東にあるエデンの園においてでした。そこに蛇がエバに現れて、彼女をそそのかし、それからアダムが、神が食べてはならないと言われた木の実を食べて罪を犯しました。そして、彼らはエデンの園から出ていきましたが、生まれた息子にカインとアベルがいます。カインがアベルを妬んで、弟アベルを殺しました。それから彼は親許を離れ、さすらいの人となりました。そして創世記 4 章 16 節に、「カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。」とあります。そこで文明が発達しました。けれども、そこは暴力に満ちたおそろしい社会になりました。

そして洪水の時に、そうした悪に傾いた者たちを主が滅ぼされます。しかし、その後に出てきた子孫でニムロデという人がいました。彼は権力者であり、次々に町々を征服しました。そこが、シヌアルというところ、アシェルというところ、今のイラクやイランのところ。そして、人々が東のほうから移動してきて、シヌアルという地でバベルの塔を建てたのです。そこが、天の万象を拝む星占いが始まりました。このようにして神に反抗しました。後に、この地域からアッシリヤという大国が台頭します。そしてイスラエルの民を捕え移します。その後バビロンが台頭します。そこで南に住むユダの民を捕え移します。彼らは、かつてのバベルの塔と同じように占星術をして国の動きを決定していたのです。そして、終わりの日は、東からの王たちが、かれたユーフラテス川を渡ってきます。そしてメギドというイスラエルにある地域に集結します。ここから神とキリストに反抗すべく、全世界の軍隊が戦いを始めるのです。ハルマゲドンの戦いです。そこで悪魔や反キリストの口から汚れた霊が出てきて、その汚れた霊どもが王たちをメギドに誘導することが書かれています。

そのような地域から、なんとキリストをあがめたいという人々が現れたのです。だから、驚くべきことなのです。神に呪われ、神に反抗し、神に滅ぼされるという意味合いを持っている人々が、むしろ神の民とされているエルサレムの住民よりも、キリストを求めていたということになります。

2B 賢者(信じる者)

先ほどの話に戻ります。バビロンという国が紀元前 586 年にエルサレムを滅ぼしてユダヤ人を捕虜にした時に、そのような暗黒時代に、一つの光が灯されていました。ダニエルという神に愛されたユダヤ人です。彼はバビロンの王に仕えて、また彼は夢を解き明かす力を神から与えられていました。占星術をしても決して解き明かせなかったバビロンの王の夢を彼は解き明かしました。彼は王の信頼を得て、ついにそのような賢者たちの長になりました。そして、キリストが来られることの預言も行いました。そのような暗闇の時代においても、むしろその中にいる人々に光を示すことができた証人がいたのです。そして、もしかしたらそうした知識が語り継がれてきて、賢者たちは、占星術をしながらかつ、メシヤが到来するというしるしを見つけたのかもしれませんが。

したがって、羊飼いの次にキリストの光を見た人は、ユダヤ人でもなく、むしろ遠く離れて、呪われているとまでみなされていたところから来た人々だったということです。昨日は、神の国は人の弱さ、貧しさ、そういったところで現れることを見ました。今は、神の国は遠く離れた者、神とは無関

係のところにいる者たちが引き寄せられて、近いものとされることによって広がることを見ることができるのです。

私たちはとかく、自分の環境によって運命が決まると思っています。出自が悪い人は、その影響が強くて幸せな生活ができない。そしてクリスチャンになるのも、自分の周りにクリスチャンもいないし、キリスト教とは無縁の生活をしてきた、という人たちがいるでしょう。いいえ、東方からの賢者は言うならば、最もキリストから離れていたはずの人々だったのです。そして、最もキリストに近づいていたはずの人々、今の時代に言い換えるなら教会に何度も来たことがあり、周りはクリスチャンの人でも、キリストに出会わないで一生を過ごすことも十分にあるのです。使徒ヨハネは、こう言いました。「この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:11-12)」東方からの賢者はこの方の名を信じたのです。反面、近くにいた、エルサレムの者たちは受け入れませんでした。

3B 導く星(希望の栄光)

そして彼らは、ベツレヘムに導かれました。9 彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。10 その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ。

この星について、昔、バラムという、この東方からの呪い師がキリストについて預言していました。紀元前 1440 年位のことです。「私は見る。しかし今ではない。私は見つめる。しかし間近ではない。ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみと、すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く。(民数 24:17)」ダニエルがバビロンにいた時に、おそらく呪法師たちの間に、このバラムの預言を、彼を通して知らされたのかもしれませんが。ヤコブから星が上ります、それが杖となるとありますが、つまり王のことです。杖は王が持っていました。そしてモアブを打ち砕くということですが、ダビデの時代にダビデはモアブを制して、モアブはダビデの僕となりました(2サムエル 8:2)。これらのことを預言したのが、あなたがたのところから出て行ったバラムなのだよ、と教えたのかもしれませんが。それが伝承となって、東方の賢者たちがユダヤの王となる方を、星の中で探したのでしょうか。

使徒ペテロは、キリストを明けの明星と呼びました。「また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。(2ペテロ 1:19)」明けの明星は、夜明けの時に輝く星であり、それがあれば夜が明けることを示していました。つまり、暗き世において、それが終わる希望として輝いていたのです。いかがでしょうか？今、私たちが生きている世が明るいと思いますか？それとも暗いですか？そして、一人一人の人生に光がありますか、命がありますか？それとも、光がなく、暗闇ですか？命がありませんか？

神が人となられるのにあたって、使徒ヨハネは、イエス様を「命」であり、また「光」と言い表しました。「ヨハネ 1:4-5 この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」これは、私たちだれもが直感的に知っていることです。一つは、私たちは暗闇にいるということ。そしてもう一つは光、希望と命を欲していることです。聖書は、天地創造においてこのように描いています。「初めに、神は天と地を創造された。地には形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。そのとき、神が、『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。(1:1-2)」この宇宙、自然界は初めは暗闇の中にあっただけでも、それでも神がおられて、そこに「光よあれ」と言われたのです。

私たち人間が肉体で生まれる時も、実は暗闇から光に移されました。イエス様はニコデモに話されました。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。(ヨハネ 3:5-6)」私たちは全て、母の胎内から生まれました。そこは羊水があり、水の中で私たちは生きていました。しかし暗闇です。そこから出て来る時、私たちは初めて光を見ます。人の命の誕生は、小宇宙のようです。神が天地を創造される時に行われたことを、一人一人の命の誕生においても行なわれるのです。

けれども、イエス様は水だけでなく、御霊、神の霊によっても生まれなければならないと言われます。肉体のみならず、神の霊によっても生まれなければいけないと言われます。天地が造られる時に、そこは形がなく、虚無の状態であったように、いろいろなものがあって、いろいろなことがあっても、それでもなんで自分が生きているのか、その形あるものが無いという感覚が人を襲います。ソロモンという王は、それを「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに労苦しても、それが人に何の益になろう。(伝道者 1:2-3)」と言いました。形あるものを作っているようで、実はそれは昔からあったことであり、また自分が新たに作ったと思ったら、それは全て空しく過ぎ去ることも知っています。そして人は生きて、死にます。ですから、暗闇にいるようなものです。しかし、そこにキリストという光が来られます。私たちは罪の中で死に、肉体は生きているけれども霊は死んでいた私たちを、神はご自分の霊によって新しく生きるようにされます。パウロは言いました。「2コリント 4:6「光が、やみの中から輝き出よ。」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」

4B 礼拝(力と富の移譲)

そして彼らは、幼子イエスを礼拝し、贈り物を渡します。当時は贈り物を渡す行為は、相手を王として仰いでいること、その王に服して、仕えることを意味していました。東方からの賢者が、その大きな権力と富があるにも関わらず、その幼子にひれ伏したのです。イザヤ書には、再臨のキリストに諸国が贈り物を持って来る預言があります(60:11)。けれども彼らは、力と栄光に富む再臨のキリストではなく、幼子キリストに同じ礼拝の姿勢を見せました。

ここから私たちは、人間として生きる方法を見いだします。それは、捧げる生活です。私たち人間は、神から離れていれば、自分にとって得する生活を必然的に求めます。しかし、人間は元々、明け渡し、ひれ伏すために造られました。礼拝をしているということが、もっとも自然体なのです。何かをもらっていく人生ではなく、命が注がれていく人生こそが美しいのです。今の時代は不幸です。なぜなら、自分が最も大事と教えられている時代であり、自己愛の時代であり、自分をあがめることはあっても、礼拝し、捧げることができないようにされています。東方からの賢者たちは、それを知っていました。黄金、乳香、そして没薬を捧げました。そして幼子イエスの前でひれ伏しました。まことの神、天地を造られた神が人となられたその方に礼拝を捧げることほど、美しいことはありません。